

出題分析		
試験時間 60分	配点 50点	大問数 6題
分量 (昨年比較) [減少 同程度 増加]	難易度変化 (昨年比較) [易化 同程度 難化]	
<p>【概評】</p> <p>大問数は昨年と同様だが、設問数は2問減少した。時代範囲は原始・古代～現代を対象とし、大問Iは昨年同様に全体が原始時代であった。問題形式は選択・記述併用式で、選択問題では「2つ」を選択する問題が昨年から1問増加し4問となった。大問VIは例年通り文化史を中心とした出題であり、今年国文学者藤岡作太郎の著作『近世絵画史』の内容紹介をリード文とし、図版は伊藤若冲の絵画「花卉双鶏図」が掲載された。</p> <p>一部では細かい知識を必要とする難問も見られたが、多くは標準レベルの問題で占められており、昨年と同程度の難易度と言えるだろう。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	原始時代の日本列島	旧石器時代～古墳時代の事項が問われた。ほとんどが基礎的な内容であるため、確実に正解したい。問5. 大学側から全員正解とする旨の発表があった。出題者はウを誤文と想定したと思われるが、前方後円墳の北限とされる岩手県の角塚古墳は「東北地方北部」に含まれると考えるのが妥当であるため、正文となる。	やや易
II	小右記 (史料)	頻出史料である『小右記』をもとに、撰関期の政治・文化などが問われた。問1. やや難。藤原道長の娘がそれぞれどの天皇の後となったのかは細かい。問2. オについて。当時の男性貴族の日記は、ほとんどが漢文で書かれている。問3. 『栄花(華)物語』は、藤原氏全盛期を批判的に描いた『大鏡』との区別に注意したい。問5. 純粋に下線部の意味をとれたかどうか。	標準

設問別講評			
III	分国法 (史料)	5 つの分国法の史料をもとに、戦国期の政治・社会などが問われた。問 3. 難。史料中の「恩顧の庶子のごとく」をヒントに、寄親・寄子制を思い浮かべられるか。問 4. ウは史料中の「与力の輩……沙汰に及ぶべからざるのよし」が根拠となる。問 7. ①の天文法華の乱は時期の理解が曖昧になりやすいため、しっかり押さえておきたい。	標準
IV	蘭学事始 (史料)	杉田玄白の『蘭学事始』をもとに、近世の外交・文化などが問われた。問 1. エの正誤判断は難しいが、消去法で解答したい。問 4. ①は鎖国令 (寛永十六年令, 1639 年), ②は糸割符制度の開始 (1604 年), ③はバテレン追放令 (1587 年), ④はペリー来航 (1853 年) である。問 5. エは新井白石による貿易制限や、田沼意次による貿易振興政策などを想起して誤りと判断したい。問 7. オの大塩平八郎は陽明学者である。	標準
V	近現代の政治家と弁論	近現代の政治などが問われた。問 6. このような問われ方は盲点だったかもしれない。問 8. ①の三月事件と②の十月事件は、いずれも 1931 年の出来事。問 9. リード文中の「1940 年」から判断するほかない。1940 年には阿部信行内閣→米内光政内閣→第 2 次近衛文麿内閣と交代したが、選択肢にあるのは米内内閣のみであるため確定できる。問 10. やや難。尾崎行雄が「憲政の神様」と呼ばれたことは、早稲田大学入試では過去に正誤判定問題などで扱われている。問 11. オについて。講和会議には中華民国と中華人民共和国のいずれも招かれなかった。	標準
VI	江戸時代～明治時代の日本絵画史	近世～近代の文化などが問われ、細かい知識が求められた。問 1. イについて。住吉派は朝廷ではなく、幕府の御用絵師を代々務めた。問 2. イの後楽園と迷っただろうか。問 4. 難。問 6. 難。明治時代末期以降に活躍した日本画家を想起できたかどうか。	やや難

合格のための学習法

早稲田大学文学部の日本史は一部で難問が見られるものの、ほとんどが基本的な問題で占められているため、教科書の記述内容を正しく理解し、覚えていれば高得点を狙えるだろう。教科書は欄外の注記や図版・地図・史料などの解説文もよく見ておくことが重要である。文化史は必ず出題され、美術作品の写真などの引用も多いので、教科書のみならず図録などを用いて、出典を含めてチェックすることが求められる。記述問題では誤字などのケアレスミスが無いよう、漢字で書く練習も忘れないように注意したい。